

十訓抄『大江山』 定期テスト対策問題 解答・解説

■ 解答・解説

問1 「歌合」＝うたあわせ／「直衣」＝のうし／「御簾」＝みす。

※「歌合」は、歌人を左右に分けて和歌の優劣を競う催し。「直衣」は貴族のふだん着、「御簾」はすだれのことです。

問2 「とられ」＝ラ行四段活用動詞「とる」の未然形「とら」＋受身の助動詞「る」の連用形「れ」。

※「歌詠みにとられて」で「歌の詠み手として（歌合に）選出されて」の意。

問3 （訳）「丹後へ（お手紙を持たせて）おやりになった人は、（もう京に）帰って参りましたか。（返事が来なくて、和歌のことを）どんなに心細くお思いでしょう。」

※「つかはし」は「やる・派遣する」の意。「心もとなし」は「待ち遠しい・じれったい・不安だ」、「おぼす」は「思ふ」の尊敬語で「お思いになる」。

問4 ・「つかはし」たのは＝小式部内侍が、丹後にいる母・和泉式部のもとへ、歌合に出す和歌を代作してもらうために使いの者を行かせたのだろう、と定頼がからかって言ったものです（実際に行かせたかどうかではなく、定頼の想像によるからかい）。

・「心もとなく」＝（返事が来なくて）待ち遠しく、不安に思う気持ち。

問5 「や」は疑問の係助詞で、「（使いの者は）もう帰って参りましたか」と相手にたずねる調子（問いかけ）になっている。

※相手をからかいながら問いかける、皮肉めいた調子です。

問6 いずれも尊敬の意味（用法）。

※「られ」は「過ぎなされた」「お逃げになった」と、定頼中納言を高めて表す尊敬の助動詞「らる」です（受身ではない点に注意）。

問7 「ひかへ」＝ハ行下二段活用動詞「ひかふ（控ふ）」の連用形。

※「ひかへて」は「（袖を）軽くつかんで・引きとめて」の意です。

問8 大江山・生野・天の橋立はいずれも、母のいる丹後への道のりや丹後の名所を表しています。小式部内侍はこれらを詠み込み、「丹後は遠く、まだ行ってもいないし母の手紙も見っていない」と述べることで、母・和泉式部の助け（代作）など借りずに、この歌を自分一人で即座に詠んだのだということを、機転をきかせて示しました。

問9 「いく野」＝地名の「生野（いくの）」と、「（道を）行く」の意味を掛けている。

問10 「ふみ」＝「（天の橋立を）踏み（＝踏んで）」と、「（母からの）文（＝手紙）」の意味を掛けている。

問11 イ（意外で驚きあきれる）。

※古文の「あさまし」は、よい意味でも悪い意味でも「予想外のことに驚きあきれる」が原義。現代語の「あさましい（卑しい・見苦しい）」とは意味が異なるので注意。

問12 定頼中納言が、(代作を頼んだらうとからかったところ) 小式部内侍がその場で見事な歌を即座に詠みかけてきたことに対して、**思いがけず、意外で驚きあきれた**という気持ち。

問13 ・係助詞＝やは。

・結びの語＝「ある」で、活用形は**連体形**(係助詞「やは」を受けて、文末が終止形ではなく連体形で結ばれています＝係り結び)。

・「やは」は**反語**(「こんなことがあろうか、いや、あるはずがない」)。

※「こはいかに、かかるやうやはある。」＝「これはどうしたことか、こんなことがあってよいものか(いや、あるはずがない)」と、定頼が驚きあきれている言葉です。

問14 小式部内侍が、定頼のからかいに対し、即座に(しかも掛詞を駆使した)見事な歌を返してきたため、定頼はあまりの意外さに驚きあきれてしまい、まともな返歌を思いつくことができなかったから。

問15 「覚え」は「評判・名声」の意。小式部内侍は、この出来事をきっかけにして、歌人としての評判・名声が世間に高まった(一人前の歌人として認められるようになった)、ということ。

問16 (訳)「大江山を越えて生野を通って行く道が遠いので、まだ天の橋立を踏んでもみていませんし、(母からの)手紙も見ていません。」

※「行く」と地名「生野」、「踏み」と「文(手紙)」がそれぞれ重ねられています。「母の代作などしてもらっていません＝自分一人で詠みました」という気持ちが込められています。

問17 イ(からかう・ふざける)。

※「たはぶる」は「ふざける・冗談を言う・からかう」の意。ここでは定頼が小式部内侍をからかったことを表します。

問18 定頼中納言は、「歌合に出す歌は、丹後にいる母・和泉式部に代作してもらおうのだろう。その使いの者はもう帰ってきたのか、返事が来なくて心細いだろう」と、小式部内侍が自分では歌を詠めないかのように皮肉り、からかった。

問19 小式部内侍は、定頼の袖を引きとめ、返事を待つまでもなくその場で「大江山……」の歌を即興で詠みかけ、母の助けなど借りずとも自分一人で立派に歌が詠めることを、機転をきかせて示した。

問20 (例) とっさの場面でも掛詞を用いた見事な和歌を即座に詠む、才知に富み、機転のきく人物として描かれている。

問21 A＝鎌倉 B＝説話 C＝教訓(道徳・処世訓なども可)。

※『十訓抄』は鎌倉時代中期(1252年)成立の説話集。十か条の教訓を立て、それを示す説話を集めています。

問22 ウ(宇治拾遺物語)。

※『宇治拾遺物語』は鎌倉時代の説話集。ア『古今和歌集』は和歌集、イ『源氏物語』は物語、エ『枕草子』は随筆で、いずれも説話集ではありません。
